

ベア・トップ・ドレスのファウンデーションについての一考察

鹿 島 和 枝*

A study on Foundation of Bare Topped Dresses

Kazue Kashima

要 旨 ベア・トップ・ドレスにかかせないファウンデーションについて、従来の製図では、デザインや体型に合わせるための補正が多いことから、製図法及び縫製法について調査研究を行った。

方法は1989年～1992年の服飾雑誌からイブニング・ドレスのベア・トップ・ドレスのデザインを形態別に分類し、イブニング・ドレスのファウンデーションの調査を行い、①デザインの特徴、②内側の構成、③ファウンデーションの形態、④縫製の特徴などを調査した。また、ファウンデーションの製図法についてトワルの試着実験を行った。

結果として、ベア・トップ・ドレスの形態は、胸部を強調しないものと強調したものに分けられた。また、ファウンデーションの調査においては、製図のみでは知り得なかった、動き易く、着崩れず、安定感を保つための内側の縫製法を知ることができ、調査結果を参考に2種類の形態のファウンデーションの試着実験を行い、扱い易く、補正し易く、デザインに合わせ易い製図を検討した結果、比較的良好な製図法が得られ実物製作を行った。

I は じ め に

イブニング・ドレスのベア・トップ・ドレスにとって必要な要素は、着装する際に着脱し易く、かつ、着崩れず、安定感があることである。特にベア・トップ・ドレスにおいては、この3要素を満たし、重要な役割を果たすものが、ファウンデーションである。

ファウンデーションの製図は、いろいろあるが、私が採用した方法では、デザインに合わなかったり、体型に合わせるための補正が多かったことから、パターンに問題点があると考えられる。イブニング・ドレスにとってのファウンデーションは大切なものであるのに製図法や縫製法などの文献が乏しいため、本研究は、試着実験を行いファウンデーションの適合性や適応性を検討し、計測の重要性や縫製法の大切さを知ることができた。その結果を報告する。

II 調 査 研 究

1. 国内外のファッション雑誌によるベア・トップ・ドレスのデザインの分類

1989年～1992年のファッション雑誌（国内誌3誌、海外誌6誌）の中のベア・トップ・ドレス80体に関して分類すると、次の2種類に大別できる。

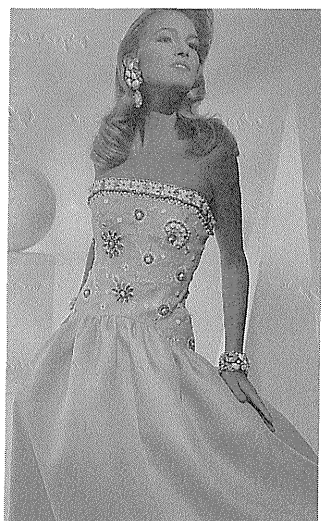
第1類として「胸部を強調しないもの」

胸部の凹凸をはっきり表現せず、胸部から胴部にかけて、なめらかなラインのもので、その中をさらに①シンプルなもの、②服飾を加えたもの（図1-1）、③土台を覆ったもの（図1-2）に分類した。

第2類として「胸部を強調したもの」

胸部の張りを鮮明に表現し、女性らしさを強調したもので、さらに①シンプルなもの、②装飾を加えたもの（図1-3）、③ビュスチェ・スタイルのもの（図1-4）、④特殊なものに分類した。

* 本学助手 被服構成学



1. 1990年モードモード No. 270
HUBERT DE GIVENCHY
上半身に刺しゅうを施したドレス



2. 1991年 COLLEZIONI No. 21
LECOANT HEMANT
身頃を覆った布をリボンのように
結んでアクセントにしたミニ丈の
ドレス



3. 1989~90年
gap HAUTE COUTURE
TED LAPIDUS
強調した胸部に刺しゅうを
施したドレス



4. 1990年モードモード No. 269
CHANTAL THOMASS
エコロジカルでソフト
な女らしい皮革のツー
ピース

図1 ベア・トップ・ドレスのデザインの分類

これらの作品に付随しているファウンデーションの形態は、第1類は胸部を押さえ、胸部から胴部にかけて平面的に構成されたもの。第2類は胸部を形良く整え、収まりを良くするためにカップ形式を取り入れ、乳房を包んだ立体的なファウンデーションであると思われる。

2. イブニング・ドレスのファウンデーション調査について

トワルによるファウンデーションの試着実験の前に、本学所蔵のイブニング・ドレスの調査及び市場調査を行った。調査目的は、ベア・トップ・ドレスの内側の構成や縫製の特徴をとらえ、ファウンデーションの製図を確立するためである。

(1) 本学所蔵のイブニング・ドレスについて
本学所蔵のベア・トップ・ドレスの作品12点(1970年代~1991年の作品)に触れる機会を得、調査を行った。調査内容は、①デザインの特徴、②内側の構成、③ファウンデーションの形態、④縫製の特徴などである。

(2) 市場調査について

デパートのフォーマル・コーナーやウェディング・ドレス専門店、オートクチュール店を対象にベア・トップ・ドレス30点に関して調査を行った。調査内容は、(1)と同様である。調査期間は、1992年1月~3月である。

(3) 調査結果

① デザインの特徴

•ベア・トップ・ドレスの形態は、格調を重んじたイブニング・ドレスを始め、ウェディング・ドレスやお色直しのカラーフォーマル・ドレス、パーティ・ドレスなどに多く、ビュスチュ・スタイルのように上下に別れたものにも取り入れられている。

② 内側の構成

•イブニング・ドレスは、ファウンデーションが付随しているものがほとんどであった。特にオートクチュールのものでは、ドレスの形態を保たせるためにしっかりと仕立てられたファウンデーションが付随している。また、イージーオーダーのものの中には、ファウンデーションがないものも見られた。

③ ファウンデーションの形態

ア. 素材

ファウンデーションの素材としては、・シルクタフタ地（絹100%）、・ドレスと共布、・グログラン地（綿100%）、・オビテックス地（綿100%）、・厚手の裏地、・裏地の2枚重ね、がもっとも多く使用されている。

イ. 形態

ファウンデーションの形態としては、近年はHL丈（トルソー型）は陰をひそめ、ほとんどのものが、WL丈である。ドレスのデザインが第1類のファウンデーションはプリンセスライン切り替えのものが多く、乳頭に向けてダーツ

を入れ、体に合わせる工夫が見られる。また、ドレスが第2類のファウンデーションは、胸部を必ずカップ形で切り替えて強調したものであることが判明した。

ウ. ボーンの種類

ファウンデーションに用いるボーンの種類には、図2のa～fがある。調査した作品では、・コイルボーン、・波状の針金ボーン、・ライクボーンテープが使用されていた。

ボーンの種類と特徴

- a. 不織布と平織りテープに挟まれたボーンテープ
 - ・長さを自由にカットでき、直接ミシンステッチで止めることができる。
- b. 平織りテープに挟まれたボーンテープ
 - ・aと同様であるが、縫い代にまつりで止めることもできる。
- c. ワイヤー2本入りボーンテープ
 - ・ワイヤーがソフトなためデザイン上、張りを持たせたい所にミシンで止められる。
- d. ライクボーンテープ
 - ・幅は3mm、6mm、12mmがあり、直接ミシンステッチで止めることもできるが、裏地が付かない場合は綿テープをミシンステッチで止めた間に通すか折り伏せ縫いの間に通す。
- e. コイルボーン
 - ・ソフトタイプとハードタイプがあり、長さは20cm、30cmがあるが、留め金具（別売）で調節が可能である。綿テープをミシンステッチで止めた間に通すか共布のバイアスで包んでまつる方法もある。
- f. 波状の針金ボーン
 - ・胸部に用い、針金なので自由な形に固定できる。綿テープをミシンステッチで止めた間に通す。

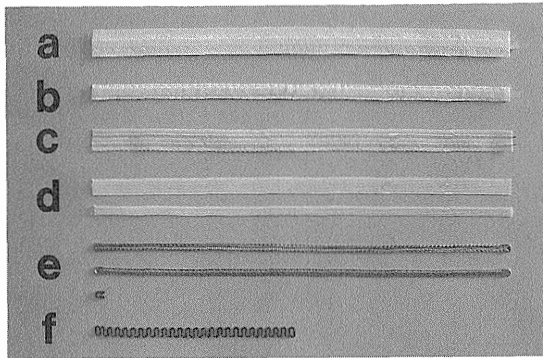


図2 ボーンの種類

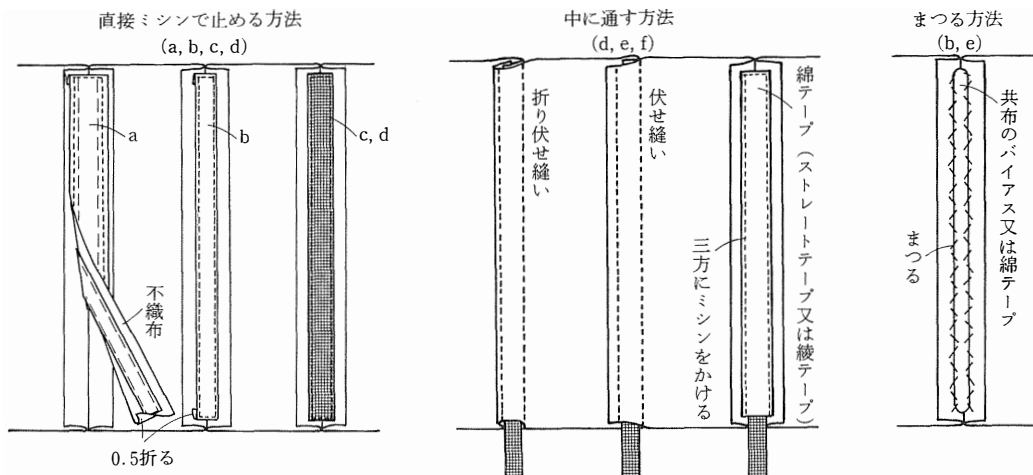


図3 ボーンの止め方

④ 縫製の特徴

ファウンデーションの縫製についての特徴としては、4点あげることができる。

ア. 切り替え線の縫い代の始末

縫い代の始末の方法は、・ピンキング、・裁ち目かがり、・折り伏せ縫い、・伏せ縫いによって始末されているものが多い。

イ. ボーンの止め方

ボーンを止める場合の方法として、・切り替え線を縫い合わせた縫い代を割り、直接ボーンテープをミシンで止めたもの、・切り替え線を縫い合わせた縫い代を割り、綿テープやリボンでミシンで止めた間にボーンを通したものや切り替え線を伏せ縫いし、その間にボーンを通したもの、・共布のバイアスや綾テープで包んだボーンを切り替え線の縫い代を割った上にまつりつけたものがあつた。(図3)

ウ. ファスナー

ファスナーは、・金属ファスナー、・エフロン・ファスナーや・オープン・ファスナーなどが使用され、しっかりとミシンステッチや星止めで止められている。

エ. 内ベルト

内ベルトは、・グログランリボンを一重または二重にしたもの、・裏地で包んだオビテックスが用いられている。

(4) 考 察

① デザインの特徴

・ベア・トップ・ドレスのデザインは、華麗でドレッシーなものが多く、豪華さを出すために刺繍やドレープなどの技法が施されたものが多い。また、ほとんどがロング・ドレスである。そのため、布の使用量が多く重量であるから、着崩れず、着脱は容易でなければならない。着用は、上から被るのではなく、下からはく形式であり、あきは、左脇あきもあるが、後ろあきが多い。

・前述の1でデザインの分類をしたように、胸部を強調しないものと強調したものの2形態に分けられ、内側の構成にも違いがある。

② 内側の構成

ア. ファウンデーションがあるもの

ファウンデーションがあるものとしては、・ドレスとは別に仕立てられ、見返しの際にまつられているもの、・別仕立てではあるが、見返しと一緒に縫い込まれているもの、・ドレスの装飾を止め付ける土台として、裏地の中に入っているものの3つに区分できた。

イ. ファウンデーションがないもの

ファウンデーションがつかないドレスの場合は、ドレスの切り替え線の縫い代にボーンを止め、ボーンや内ベルトでドレスの形態をしっかりと保たせたものが多く、中には胸の上部にゴムテープを通したドレスもあつた。いずれも、軽くて簡単なドレスに見られた。

③ ファウンデーションの形態

・素材は、直接人体に接し、生理的代謝に対応するものと考えていたが、オートクチュールでは現在も絹や綿を使用しているのに対し、既製服ではほとんどが化繊を使用していた。理由の第一は、コスト安のためではないかと思われる。

・ファウンデーションの丈は、最近のものはWL丈までのものがほとんどである。簡略化され、合理的に製作でき、体に合わせ易いと思われる。また、スカート部分には、パニエを着用することが多いためでもある。

・ドレスの胴部切り替え線が、WLより下にあるものやストレートなロングドレスなどのファウンデーションは、HL丈である。胴部から腰部にかけて、すっきりさせるためとドレス表面へのあたりをなくすためと考えられる。この時のボーンの長さは、動作に支障ないようにWLより、5.0 cm 位長いものが使用されていた。

・胸部を強調しないデザインでも、ファウンデーションには、乳頭間に横にダーツを入れたり、脇ダーツを入れることで人体に合わせる技法が見られる。これは、ファウンデーションの形態が、ドレスのデザインに対応しながらも人体に合わせることが第一目的であることを確認することができた。

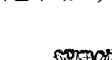
・胸部を動き易く、かつ、安定感を保つために、縦の切り替え線にボーンが入っている。ボーンは、オートクチュールではコイルボーンが多く使用されているが、他はほとんどがライクボーンテープを使用している。長さが自由にカットでき、扱い易いためと思われる。

④ 縫製の特徴

・切り替え線の縫い代の始末は、表にあたりを出さないように薄く仕立て、また、縦の切り替え線には必ずボーンが止められ、ボーンの種類によって止め方も違ってくる。

・ファウンデーションを裏地の中に入れてしまう場合は、ドレスの補型や装飾を止め付けるための土台として縫い合わせるので、外すことができない。一方、別仕立ての場合は、ファウンデーションを単独に仕立てて、ドレスの見返しにまつるか糸ループで止めるため、外すことが可能である。

・ボーンは、上部ラインから WL にかけての縦の切り替え線に入れることで、ドレスを体に添わせる役目をしている。また、ドレスのデザインや重量によっては、ボーンの本数が増えている。



- ・ファウンデーションが別仕立ての場合のファスナーは、ドレスとファウンデーションは別々になっている。また、ファスナーの長さは腰部が入るように HL より長くし (図6 参照)、ビュスチェの場合にはオープンファスナーを使用している。

・ファウンデーションに内ベルトをかかすことはできない。位置としては、WLより1.0 cm～2.0 cm 下に、W 寸法のベルトを糸ループまたはミシンで固定し、カギホック止めされている。これは、ドレスの重さをささえ、それ以上、下に下がらないようにするためであると思われる。

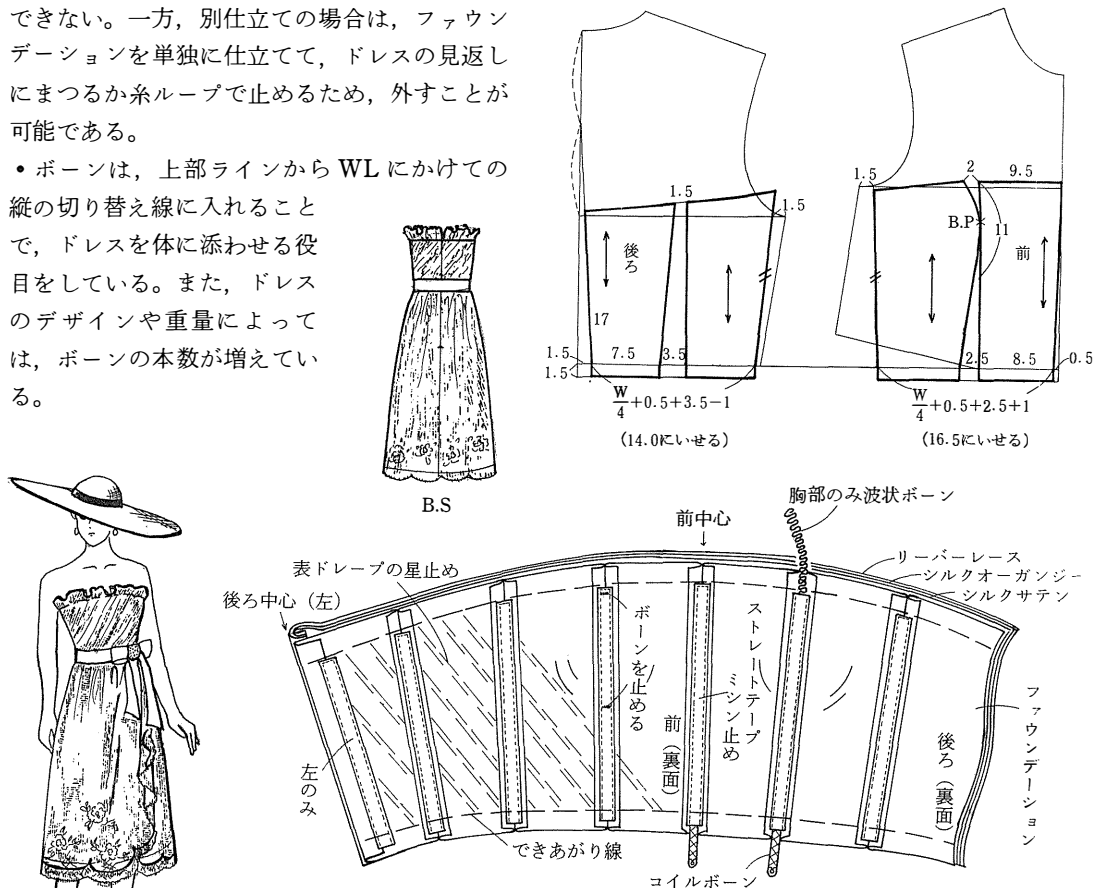


図 4-1 資料 No. 5

EMANUEL UNGARO 作品

(文化女子大学第2被服研究室所蔵)

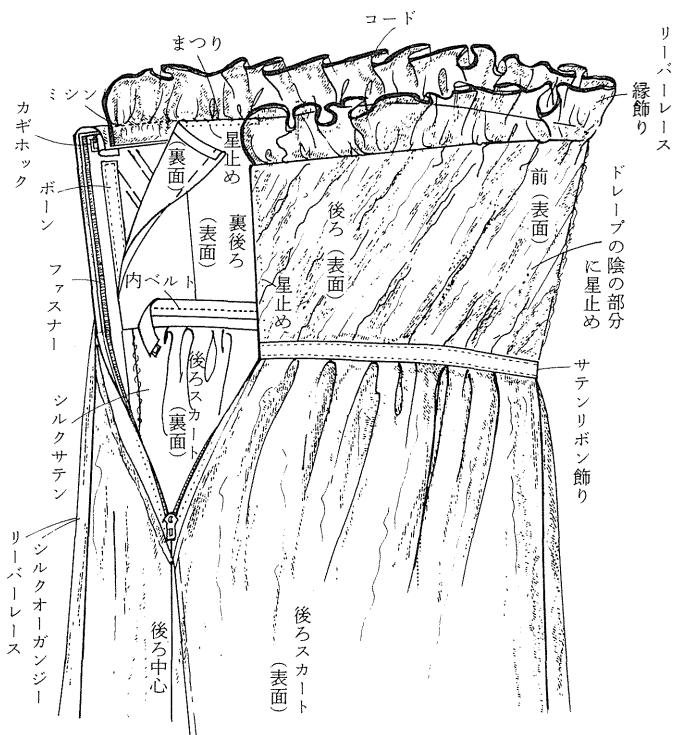


図 4-2

(5) ファウンデーション製作のための参考資料

内側の構成に特徴のある資料3点をあげる。

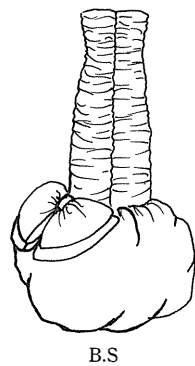
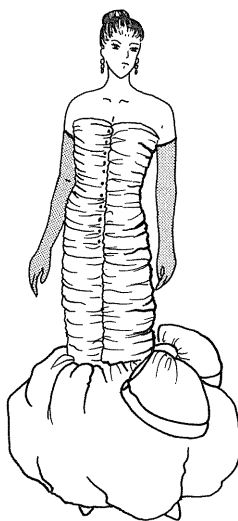
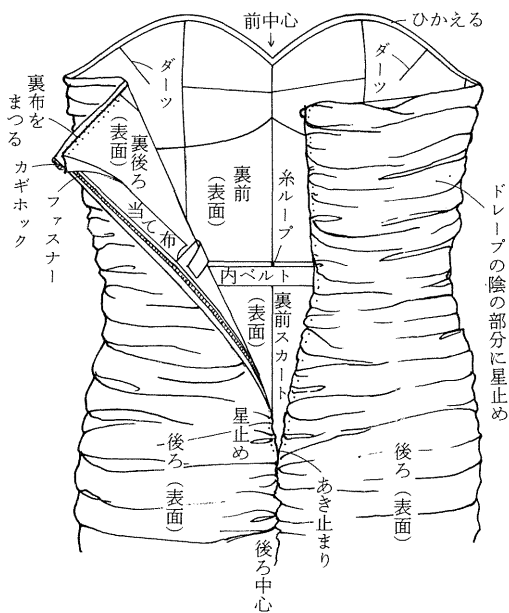
•資料 No. 5 イブニング・ドレス
1980年 EMANUEL UNGARO 作品

オフホワイトのリーパーレース地のドレスに飾りベルトが付いている。

ファウンデーションの形態は、WL 丈、胸部を強調しない形で、表のドレープを止めつけるための土台となり、ファウンデーションをかくすために裏地がつけられている。W 寸法の内ベルトは、ドレスをいせかげんにしてミシンステッチで止めている。(図 4-1, 2)

•資料 No. 17 イブニング・ドレス
1987年 EMANUEL UNGARO 作品

オレンジ色のタフタ地を使用したマーメード・ライン、バルーン



B.S

図 5 資料 No. 17
EMANUEL UNGARO 作品

ベア・トップ・ドレスのファウンデーションについての一考察

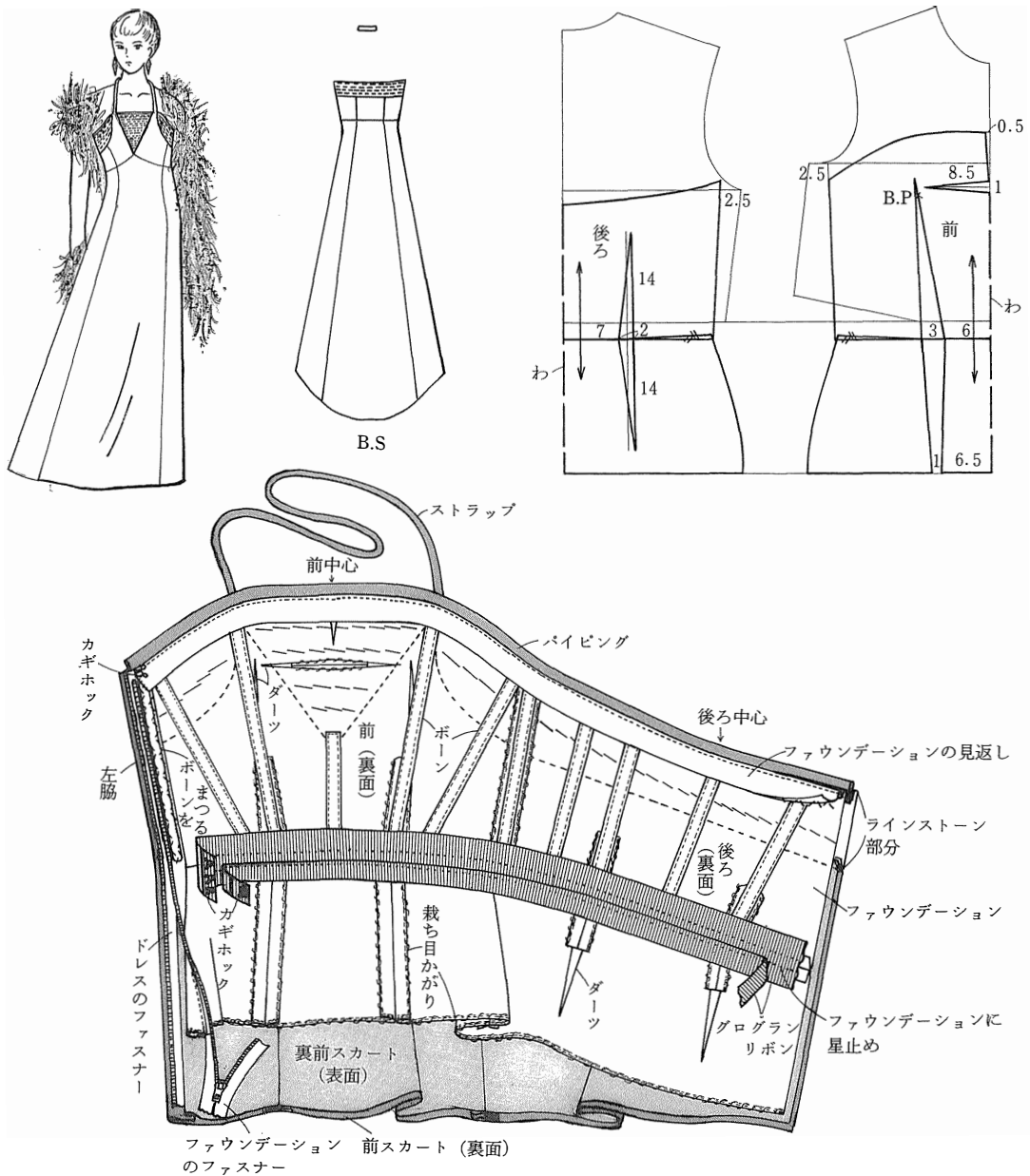


図6 資料 No. 3

NINA RICCI 作品

(文化学園服飾博物館所蔵)

・スカートのドレス。

ファウンデーションの形態は、WL 丈、胸部をカップ形切り替えて強調した形で、ファウンデーションをかくすためにドレスには、裏地が

つけられている。内ベルトには、裏地で包んだオビテックスが使用されている。(図5)

・資料 No. 3 イブニング・ドレス

1975年 NINA RICCI 作品

黒地ロング・ドレスにラインストーンが装飾されたもの。

ファウンデーションの形態は、HL 丈、胸部を強調しない形で、ファウンデーションは別仕立てではあるが、図 6 のようにラインストーンをファウンデーションまですくって止めている。ラインストーンを支えるため、ボーンが12本使用されている。(図 6)

Ⅲ ファウンデーションの製図と 試着実験

1. ファウンデーションに関する人体計測

(1) 被検者

被検者としては、9AR に近い本学学生 5 名を選び、計測及び試着実験を試みた。

(2) 計 測

ベア・トップ・ドレスにおけるファウンデーションの 3 要素を満たすためには、下着を着用しない時とした時の体型の変化を把握する必要があると考え、計測を行った。

計測の条件は、1. 下着を着用しない時（以下未着用時とする）、2. ブラジャー着用時、3. ファウンデーション着用時の 3 状態について計測を行った。ファウンデーションは、同一のものを着用した。

(3) 計測項目

計測項目は、ファウンデーション製作に重要である上半身を主とした10項目である。① BL 囲、② UBL 囲、③ WL 囲、④ HL 囲、⑤ 背丈、⑥ 乳頭間隔、⑦ 前丈、⑧ 乳下がり、⑨ WL～UBL の高さ、⑩ 身長である。計測に際しての注意点は、以下に示す通りである。

① BL 囲は、乳頭点 (BP) を通る水平な周径とし、後ろが下がらないように注意する。

② UBL 囲は、乳房下縁点 (UBL) を通る水平な周径とし、ファウンデーション製作には重要な位置である。

③ WL 囲は、WL を通る水平な周径である。

④ HL 囲は、臀部後突点 (HL) を通る水平

な周径とし、腹部に柔らかいセルロイド板を当てて計測する。

⑤ 背丈は、頸椎点 (BNP) から後ろ正中 WL までの実長である。

⑥ 乳頭間隔は、左右乳頭点間の距離である。

⑦ *前丈は、今回、頸椎点 (BNP) から乳頭点 (BP) を通り、その直下 WL までの実長である。

⑧ *乳下がりも今回は、頸椎点 (BNP) から乳頭点 (BP) までの実長とした。特にファウンデーション製図においては、BP の位置が重要である。

⑨ WL～UBL の高さは、WL から乳房下縁点 (UBL) までの実長とした。ファウンデーション製図では乳房の位置を知ることが大切である。

⑩ 身長は、床上から頭頂点までである。

*今回は頸側点 (SNP) が見つけにくいため、頸椎点 (BNP) からの実長とした。

また⑥～⑨は図 7 に示した。

(4) 計測方法

マルチン計測法を用い、巻尺にはテープメジャーを使用し、静立時の計測を行った。

(5) 結果及び考察

計測結果は、表 1 の通りである。また、未着用時を基準とし、ブラジャー、ファウンデーション着用時の計測値の変化を表 2 に示した。変化のある項目について比較考察した。

•BL 囲 BL 囲

は、未着用時に比べ、ブラジャー・ファウンデーションともに着用後は、寸法が大きくなる傾向にある。特にファウンデーションにおいては、+0.6%～+4.4%大きくなった。

•UBL 囲 UBL 囲

囲は、ブラジャー

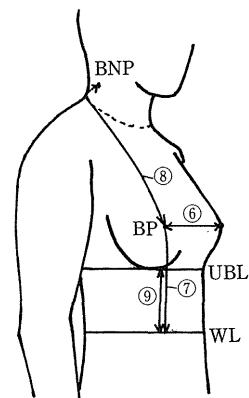
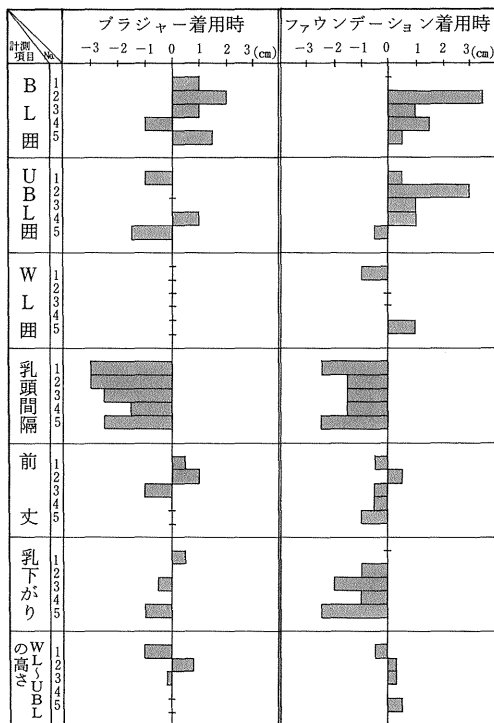


図 7 計測項目 (⑥～⑨)

表1 計測結果

被 検 者	1			2			3			4			5		
計測項目 (cm)	未 着 用 時	ブラ ジャー 着用 時	ファ ウン デー ション 着用 時	未 着 用 時	ブラ ジャー 着用 時	ファ ウン デー ション 着用 時	未 着 用 時	ブラ ジャー 着用 時	ファ ウン デー ション 着用 時	未 着 用 時	ブラ ジャー 着用 時	ファ ウン デー ション 着用 時	未 着 用 時	ブラ ジャー 着用 時	ファ ウン デー ション 着用 時
① BL 囲	82.0	83.0	82.0	80.0	82.0	83.5	81.0	82.0	82.0	82.0	81.0	83.5	83.5	82.0	84.0
② UBL 囲	72.5	71.5	73.0	73.0	73.0	76.0	71.0	71.0	72.0	69.5	70.5	70.5	72.0	70.5	71.5
③ WL 囲	63.5	63.5	62.5	62.0	62.0	62.0	63.0	63.0	63.0	61.0	61.0	61.0	61.0	61.0	62.0
④ HL 囲	90.0			90.5			88.5			89.5			88.0		
⑤ 背 丈	39.0			38.5			37.0			37.5			39.5		
⑥ 乳頭間隔	19.0	16.0	16.5	19.0	16.0	17.5	19.0	16.5	17.5	17.5	16.0	16.0	20.0	17.5	17.5
⑦ 前 丈	51.5	52.0	51.0	49.0	50.0	49.5	48.0	47.0	47.5	52.0	52.0	51.5	53.0	53.0	52.0
⑧ 乳下がり	31.0	31.5	31.0	31.0	31.0	30.0	33.5	33.0	31.5	34.5	34.0	33.5	33.5	32.5	31.0
⑨ WL~UBL の高さ	14.5	13.5	14.0	13.7	14.5	14.0	10.2	10.0	10.5	12.5	12.5	12.5	14.5	14.5	15.0
⑩ 身 長	158.0			157.0			154.5			157.0			160.0		

表2 計測値の変化



着用時より、ファウンデーション着用時では、
+0.7%~+4.1%大きくなっている。これは、
ボーンの厚み加わるためと考えられる。

・乳頭間隔 乳頭間隔は、ブラジャー・ファ
ウンデーションを着用すると乳頭間が、2.0
cm~3.0 cm (-8.6%~-15.8%) 狭まり、乳
房が中央によせられる結果が得られた。

・乳下がり 乳下がり、ファウンデーション
を着用することで、胸部が持ち上げられるた
め、数値が小さくなっている。これは、ボーン
によってバストアップされた結果と言えよう。

・WL~UBL の高さ WL~UBL の高さは、
ファウンデーションを着用すると長くなる。つ
まり、乳頭点が確実に上がる傾向がわかった。

以上の結果から、ファウンデーションは、乳
房を固定し、胸部をすっきりさせるとともに、
体型を整えるための重要な下着であることが理
解できた。

2. 試着用ファウンデーション製作

2-1 HL 丈のファウンデーションの試着実験

(1) 製図方法

試料を作るために製図として、文化式婦人原型（9AR）を用いて、一般に発表されている製図法を参考に、胸部を強調しないもの2体と胸部を強調したもの4体の計6体を製図した。

(2) 試験布

試着用ファウンデーションには、シーチングを使用した。諸元は表3に示す通りである。

(3) 試着実験

6体のファウンデーションについて試着検討し、そのうち、製図がわかり易く、補正しやすい点に重点を置き、製図A, B, C 3体を選んだ。補正後さらに試着実験を行った。図8-1, 2, 3は、その試着写真である。

製図3体の特徴としては、

- ・製図Aは、2面構成で、胸部を強調しない形である。なめらかなラインを出す時に有効と思われる。
- ・製図Bは、胸部を強調しない形であるが、4面構成のプリンセスライン切り替えを用いた。補正がしやすいと思われる。
- ・製図Cは、胸部を強調するためにカップ形切り替えを用いた。胸部の凹凸を表現するためには、有効と思われる。

(4) 結果及び考察

以上の結果より、次のことが判明した。

①原型には、ゆるみが入っているが、ファウンデーションには、ゆるみがいない結果となった。しかし、胸部を強調した製図Cにおいては、BL 囲で乳頭間を体表の凹凸に添わせる形態のため、A・Bより、カット

表 3 試験布の諸元

試験布	材質(%)	組織	糸密度(本/cm)	厚さ(mm)
シーチング	綿100	平織	29×27	0.25

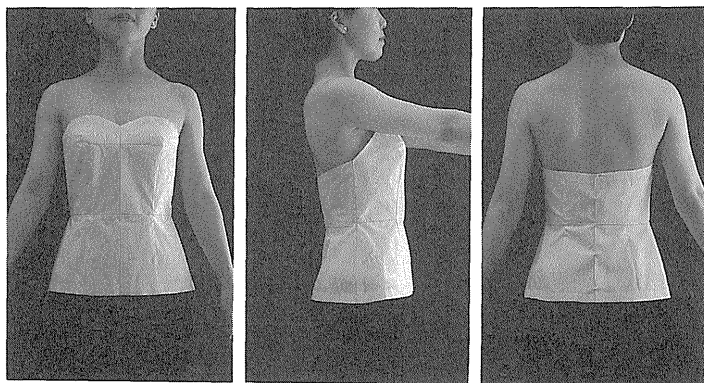


図 8-1 製図 A (胸部を強調しないもの)

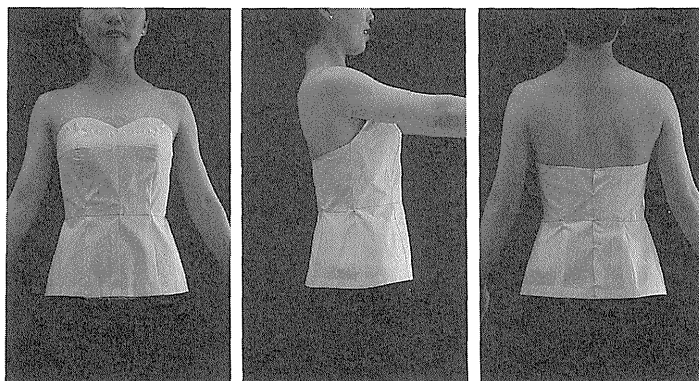


図 8-2 製図 B (胸部を強調しないもの)

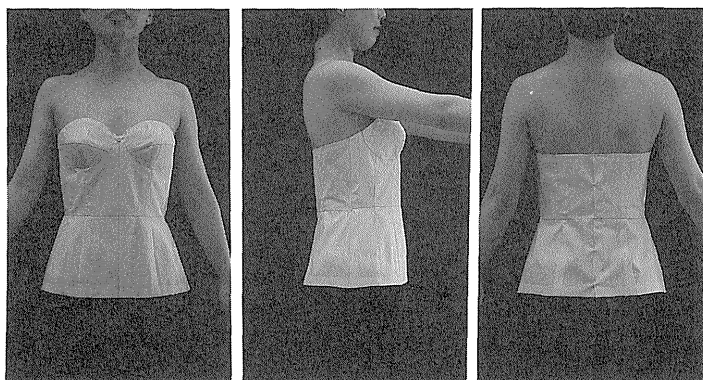


図 8-3 製図 C (胸部を強調したもの)

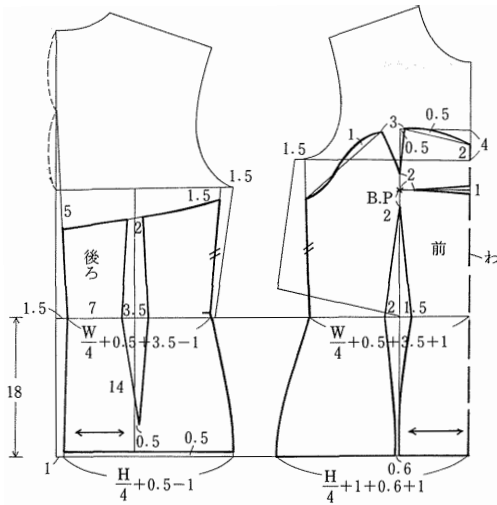


図 9-1 製図 A

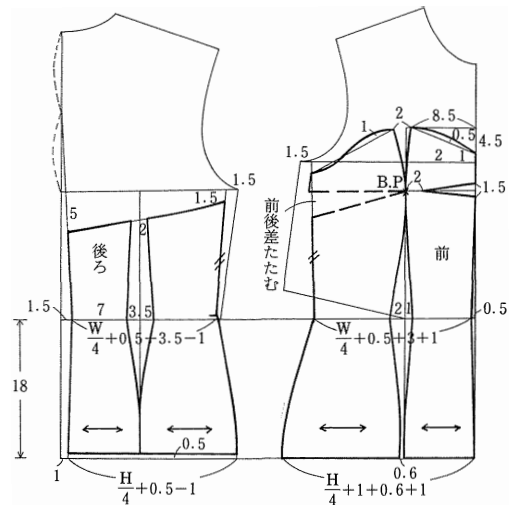


図 9-2 製図 B

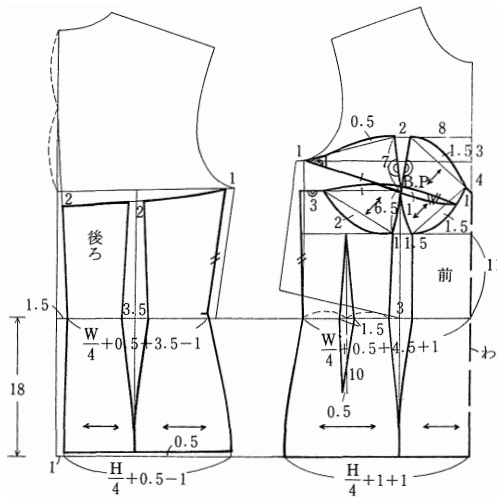


図 9-3 製図 C

分が少ない結果となった。

②製図 A, B では、乳頭間にダーツを入れたことで、乳頭間の浮きを多少防ぐことができた。

③腹部、臀部の張りが強くても、HL 上で切り替え線を交差する必要はなく、製図 A, B においては、HL 上で 0.5 cm～1.0 cm あけても良い結果となった。

④WL 囲と HL 囲の差が大きい場合は、脇線にむりが生じるため、ダーツや切り替えを入

れ、むりのない線に修正した方がよい。

⑤カップ形式の製図の場合は、乳房の位置が重要であるため、WL～UBL の高さの計測が必要である。今回は、11.0 cm に設定した。また、カップを縦方向と横方向に切り替えを入れたことで、B 寸法と UB 寸法の差による補正が容易となる。

⑥プリンセスライン切り替え線の位置は、計測結果より、ブラジャー着用時の乳頭点を通るように製図した方がよい。

⑦前上部のライン設定は、ドレスのデザインに合わせ、後ろ上部のライン設定は、肩甲骨の下を通った方が収まりが良い結果が得られた。

⑧HL 丈の製図の場合、臀部上部にたるみが出る傾向にあるため、後ろ脇線の合印を図 9 のように 0.5 cm～1.0 cm ずらすとよい。

⑨ファウンデーションは、胴部に密着したものであるが、ある程度のゆとりは必要である。ゆとり量は、W 寸法に 2.0 cm, H 寸法で 3.0 cm が適当と思われる。

⑩HL 丈のファウンデーションの布目は、横に引っ張られることを考え、裾線に縦布目(耳)を通す。布端の耳を使用すると、ドレスの表側にあたりの出ない利点がある。

3 体の製図は、5 名のモデルに適合度が高く、

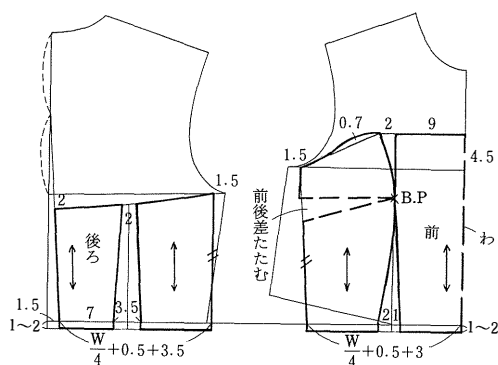


図10 ファウンデーション製図（胸部を強調しないもの）

比較的良好な製図法が得られたと思う。また、固体差に対応できるパターン作成には検討の余地を残すが、以上の結果を踏まえて、ドレスのデザインに合わせたファウンデーションの製図を行うことが望ましいと考える。図9-1, 2, 3は最終結果の製図である。

2-2 WL 丈のファウンデーションの試着実験
調査結果より、WL 丈のファウンデーションは、ほとんどのドレスのデザインに対応できると考え、HL 丈のファウンデーションの試着実験から得たものを加味し、WL 丈のファウンデーション製図を行った。製図は、胸部を強調しないもの（図10）と胸部を強調したもの（図11）である。

試着用ファウンデーションには、シーチングを使用し（表3参照）、ファウンデーションの試着実験を行った。

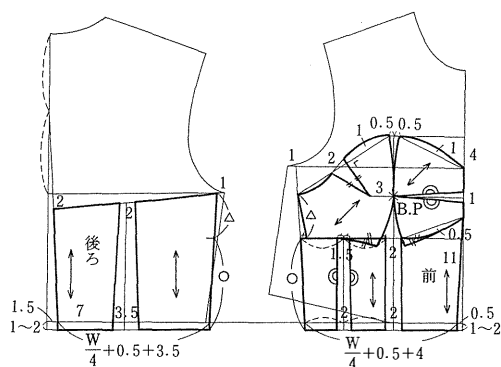


図11 ファウンデーション製図（胸部を強調したもの）

結果及び考察

- 丈は、内ベルトが落ち着く位置に止められることを考え、WL より1.0 cm～2.0 cm 長くすると良い。
- 脇線は、前後差がいない結果となった。
- WL のゆとり量は、2.0 cm が適当であった。
- 上半身のみのため、体型による補正も容易である。

HL 丈のファウンデーションと WL 丈のファウンデーションの試着実験の結果を通して考えられることは、WL 丈のファウンデーションは、ドレスのデザインに合わせ易く、製作し易く、扱い易く、体型補正もし易いことがわかり、また、ほとんどのドレスに適合することがわかったため、ファウンデーションの実物製作を行った。

表4 ファウンデーション用布の諸元

布 名	材質(%)	組織	糸密度 (本/cm) たて×よこ	厚さ (cm)	硬軟度 (cm) たて×よこ	水分率 (%)	通 気 度 (cm ³ /cm ² /sec)	透湿率 (%)	吸水高 (cm)	放水量 (g/h)
グログラン	綿 57 レーヨン43	平織	86×14	0.046	3.8×5.3	9.5	10.9	26.2	3.73	0.083
キャリコ	綿 100	平織	38×32	0.024	6.8×5.3	6.2	15.3	29.2	4.83	0.151

硬軟度は45°カンチレバー法、透湿性は蒸発カップ法、吸水性はバイレック法を行った。

Ⅳ ファウンデーション製作

(1) ファウンデーション用布

肌に直接あたる場合が多いので、下着ということを考慮した布地の選定が重要であると考えた。今回は、素材に綿を主にした、一般に入手しやすい布地から、グログランとキャリコの2種類を選び、使用した。

諸元は、表4に示す通りである。

(2) 製作方法

ミシン糸は、シャッペスパン糸（#60/3(z) ポリエステル100%）を使用し、ミシン針は11番を用いて（針目14～16針/3 cm 間）、ミシン縫製を行った。

ファウンデーション作品1

図10の製図にキャリコ地を用い、別仕立てのファウンデーションとした。切り替え線の縫い代は、洗濯に耐えるように折り伏せ縫いし、その間にライクボーンテープを通した。上部ライクの縫い代の始末は、綾テープ（綿100%）を用いて縫い返し、ミシンステッチで止めた。WLの縫い代は、グログランリボンをミシンステッチで止め、ファスナーは、腰部が入るようにHLより少し長めのものを後ろ中心上端より0.7 cm 下げた所から、エフロンファスナーをミシンステッチで止めた。内ベルトは、グログランリボンを二重にし、W 寸法にストロングホックを止めた。ファウンデーションの切り替え線の縫い代の箇所内ベルトを糸ループで

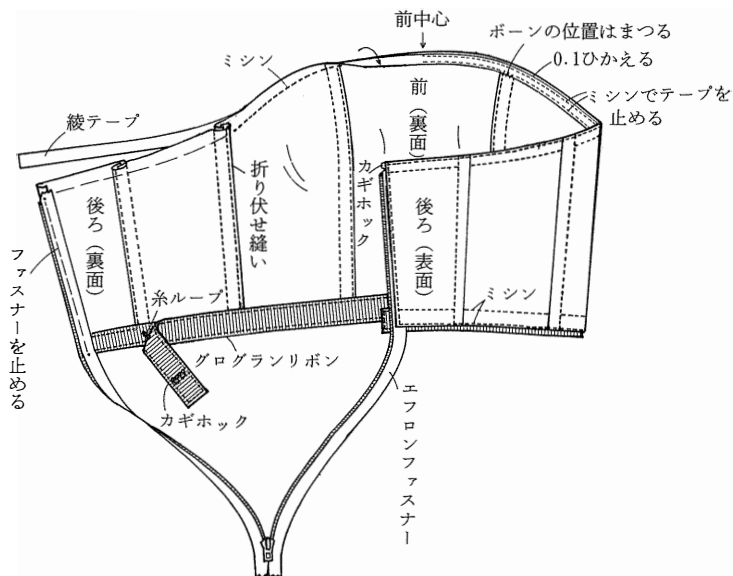


図12 ファウンデーションの縫い方図（作品1）

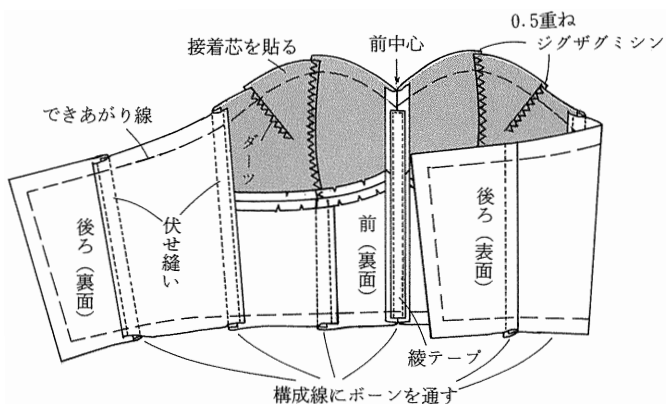


図13 ファウンデーションの縫い方図（作品2）

止めた。この時、ファウンデーションには2.0 cm のゆとりが入っているため、内ベルトは吊りぎみになる。最後に後ろ中心上端にカギホックを止めた。（図12）

ファウンデーション作品2

図11の製図にグログラン地を用い、ドレスの土台としてのファウンデーションとした。胸部では、カップの補形のため接着芯（ダンレーヌDX3001）を張り、切り替え線は、薄く仕上がるように0.5 cm 重ねてジグザグミシンで止め

た。胸部は、切り替え線（中心、脇以外）の縫い代は、厚くならないように伏せ縫いし、UBL の位置では、厚くならないように縫い代を割った。次に脇縫いを伏せ縫いし、前中心は縫い割って、綾テープを止めた。切り替え線と前中心にライクボーンテープを通した。今回は、上部ラインと WL・背中心の縫い代は、縫い込みが可能なように残し、できあがり線に縫い印を入れた。（図13）

(3) 結果

ファウンデーション作品 1 では、体型に合わせながら、胸の張りのないシルエットのファウンデーションができた。ファウンデーション作品 2 では、カップの補形のために接着芯を貼ったことで、胸部の凹凸を立体的に包むことができ、胸の張りをはっきり出せたファウンデーションとなった。

それぞれの目的に合ったファウンデーション製作ができたと思う。

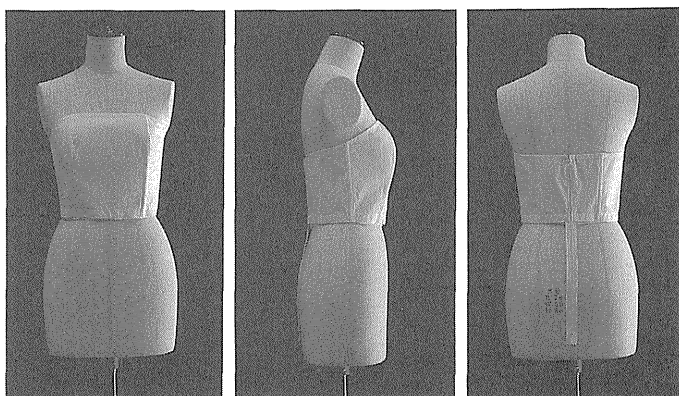


図14 ファウンデーション作品 1

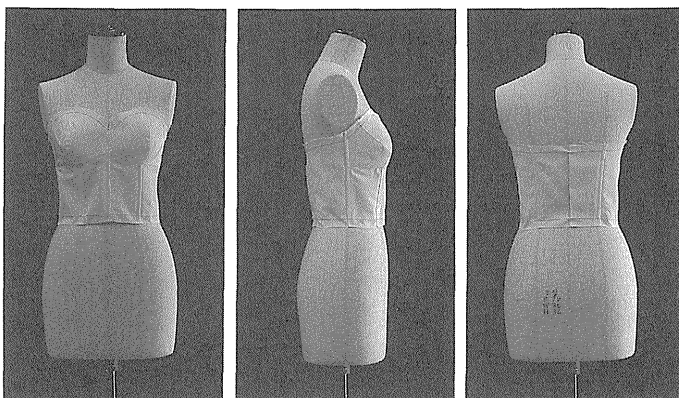


図15 ファウンデーション作品 2

V 総 括

今回、ファウンデーションについて調査研究した結果をまとめると次のことが言える。

1. 市場調査では、ファウンデーションの丈が、自分の考えとは違って、WL 丈までのものが、ほとんどであった。

2. ドレスのデザインは、大別すれば胸部を強調しないものと強調したものの 2 形態であり、今回のファウンデーション製図法のどちらかにあてはまり、どのデザインにも適応できる。

3. ファウンデーションを製作する場合の計測は、自分に合ったブラジャーを着用し、正確に計測することが重要である。

4. WL～UBL の高さの計測は、乳房の位置を知る上で重要であり、ファウンデーションにとって UBL は乳房を支える位置でもある。

5. WL 丈のファウンデーションは、補正しやすく、簡単に製作できる。

6. 内ベルトは、ドレスの重さを支えるための重要なものであり、WL より 1.0 cm～2.0 cm 下の位置に W 寸法の内ベルトを付けることが望ましい。

7. ボーンは、ドレスの上半身を体に添わせる役目を果たし、重量のあるドレスの場合は、本数を増やさなければならない。

8. 縫製方法は、ドレスの土台となり、ギャザーやドレープなど止めつけた裏側をカバーするために裏地が付くものと、ドレスとは別に仕

立てて取り外せるものがある。

従来の製図を基に試着実験を行ったところ、製図上では、不確かなダーツ分量やゆとり量が明確となった。また、所蔵作品の調査や市場調査を行ったことで、トワルの試着実験のみでは知り得なかったこと、つまり、ドレスの重みや動きによる着崩れや安定感を保つための構成などを知ることができ、非常に有益であった。

ベア・トップ・ドレスを製作するためには、土台となるファウンデーションがしっかりしていれば、立体裁断によるギャザーやドレープなどの技法を自由に止め付けることができ、製作が容易になると思われる。

ファウンデーションの形態を2通りにし、製図法も簡単に補正し易い、比較的良い方法が得られた。しかし、ドレスを止めて着装した時の適応性については、研究の余地を残している。

今後は、着用実験を検討課題にしたいと考えている。

本研究にあたり、御協力いただきました文化学園服飾博物館並びに終始御指導いただきました第2被服研究室の中屋典子教授に深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 被服構成学 技術編Ⅰ，理論編 文化女子大学被服
構成学研究室編：文化出版局
文化ファッション講座婦人服 文化服装学院編：文
化出版局
SO-EN 1991年2, 3, 8, 10月：文化出版局
GAP 1989年～1991年
COLLEZIONI 1989年～1992年 No. 21, 24, 25, 26
モードエモード 1989年～1991年：モードエモード
社